

# 後漢服制考

— 読『統漢書』輿服志節記・その二 —

阿部幸信

## 緒言

前稿「後漢車制考」<sup>①</sup>では、『統漢書』輿服志上にみえる車駕制度の構成と、そこから窺える『統漢書』輿服志の史料性格について、若干の卑見を述べた。それに続くものとして、本稿では、同輿服志下に示された衣服の制度に検討を加える。

わたしが漢代の車服制度に拘泥してきたのは、それが当該時期の位階制度の可視的表現であるところから、その分析をとおして、漢代官僚機構の構造的特質を把握できると期待してのことである。この目論見は一定の成果を収めたが、しかし、これまで考察の対象としたのはもっぱら印・綬の制度に限られ、それ以外の車服——車駕・衣冠など——の制度に関しては、副次的に扱うのみであった。その理由となった諸制約については前稿で言及したので繰り返さぬこととして、いま改めて問い直されるべきは、印・綬の制度が車服制度全体の中で占めていた位置はいか

ようなものであったのか、という問題である。もちろん前稿もそのことを追究したものではあったが、車制のうちに官秩序列と理想上の周の位階序列（「公—卿—大夫—士」、以下「周制」）が併存していたことを確認するにとどまり、漢代車服制度全体の中で印・綬の制度を相対化するという目的は、いまだ達成できていない。そこで本稿において、『統漢書』輿服志下にみえる衣服制度——そこにはまさに綬の制度も含まれている——を組上に載せることで、この作業をしめくくりにしたい。

なお、輿服志の各部を示すにあたっては、前稿で掲げた略号<sup>③</sup>を使用する。考察の対象を主に『統漢書』輿服志に限定すること、器物の解説は可能な限り省略すること、位階制度と関わない記述には言及しないことなどについても、前稿と同様の方針をとる。

## 第一節 冕服の制度と『統漢書』輿服志の特質

制度の分析に入る前に、冕服にまつわる記載に基づきつつ、『統漢書』

輿服志の史料的特質について再度確認し、前稿の結論を補強しておく。他に先立ってこれを行うのは、単に冕服の制度が輿服志下で最初に述べられる内容であるからにとどまらず、『統漢書』輿服志という史料のもつ特徴を承知することなくして、以降の考察は充分に行えないと思われるためである。

まずは『統漢書』志三〇輿服志下より、問題となる一節を掲げる。

天子・三公・九卿・特進侯・侍祠侯 天地・明堂を祀るに、皆な旒冕を冠し、衣裳は玄上・纁下なり。…孝明皇帝永平二〔五九〕年、初めて有司に詔して周官・禮記・尚書皋陶篇より采り、乘輿の服は歐陽氏の説に従ひ、公卿以下は大小夏侯氏の説に従はしむ。

明帝永平二〔五九〕年の車服制度改革<sup>4</sup>をいうもので、これは漢代の衣服制度研究<sup>5</sup>だけでなく、ひろく礼制や経学にかかわる議論においても引用される、いわば『統漢書』輿服志の中でもっとも有名なくだりである。その際セットにされることが多いのが、『後漢紀』卷九明帝紀上の、

（永平）二年春正月辛未、光武皇帝を明堂に祀る。始めて冕・佩玉を服す。…漢初、文学既に闕け、時も亦た草創なれば、輿服・旗幟は一に秦の制を承け、故に少しく改むと雖も、用ふる所尚ほ多し。是に至りて天子周官・礼記の制度に依り、冠冕・衣裳・佩玉・乘輿は古式に擬せり。

で、ここから、このときの改革が冕服に限らず車服全般に及ぶものであったことが窺われる。史乗にはこれ以外に後漢時代における車服制度の制定・改変をいう記事がないことから、『統漢書』輿服志の内容は明帝が定めた制度と重ね合わせられる傾向があり、それも根拠なしとはいえないが、前稿で輿服志上の記載を検討した限りでは、『統漢書』輿服志は特定の時期の制度体系を包括的に述べたものではない、という結論が得ら

れたのであった。その見解の妥当性は、志二九輿服志上の冒頭部分における司馬彪の叙述についてみていくと、一段と明らかになる。

漢興り、文学既に缺け、時も亦た草創なれば、秦の制を承け、後に稍く改定し、六經を參稽し、雅正に近づく。

『後漢紀』明帝紀の後段（のどくに前半）との表現の共通性は明白で、両者が典拠を同じくしていることはほぼ疑いないのだが、問題はむしろ両者の相違点である。『統漢書』輿服志は明帝にまったく言及しないばかりか、漢の制度は秦制を徐々に改め（「稍く改定し」）て、経書を参照しながら上古の雅美端正さに沿うようにしていった（「六經を參稽し、雅正に近づく」）のだとし、その認識のもとに輿服志を書き起こしている。他方の明帝紀は、一部を意図的に改変はしたものの大局的には秦制の継承にすぎなかった旧制（「一に秦の制を承け、故に少しく改むと雖も、用ふる所尚ほ多し」）が、永平二年を画期として明帝により經典に拠った制度に改められた（「是に至りて天子周官・礼記の制度に依り、…古式に擬せり」）のだと説く。両者の間には、明帝の扱いかたにおいて、大きな断絶が認められる。

もちろん、前者は車服制度概論の一節で、後者は明帝の事績を伝えるものであるから、明帝に対する意識のしかたが異なるのは当然であるが、ここで重視しておきたいのは、司馬彪が明帝の改制をとくにクローズアップせず、漢代における制度変遷の一部と捉えたうえで、明帝の車服制度改革が祭祀制度と連動して行われたものであることを強調し、冕服にのみ関わるものとして永平二年の改制に限定的な言及を試みていることである。これは、蔡邕『独断』卷下が車服制度を紹介するにあたって、

冕冠、…漢興り、孝明帝永平二年に至りて有司に詔して、尚書皋陶篇及び周官・禮記より採りて定めしめ、而して制したり。

## 後漢服制考

とし、明帝の改制を冕冠に限定して述べるのと共通する態度で、恐らく司馬彪はこの記事（及び、同じく蔡邕が編んだ『東觀漢記』車服志<sup>⑥</sup>）に拠ったのであろうが、いずれにしても司馬彪が明帝についてこうした触れかたをするにとどめていることは、輿服志が明帝の制度をそのまま伝えるものではなく、より広く後漢の車服制度を概観する内容のものとして構想されたことを想定させるだろう。<sup>⑧</sup>となれば、そこに年代を異にする制度がちりばめられたり、場合によっては前漢以来の制度的変遷が盛りこまれたりしていても、別段怪しむには足りない。明帝の礼制改革と『統漢書』輿服志全体とを結びつけるには、どこまでも慎重であるべきである。

渡邊義浩は、西晋の政治を運用していくうえでの鑑とするために漢家の故事をまとめあげることが司馬彪の修史の意図であり、その反映として、『統漢書』祭祀志では漢のあらゆる祭祀の形成の経緯が、礼儀志では定例の祭祀の時系列が各々掲げられ、両者の複合によって漢の祭祀の全体像が典範として示される構造になっていた、と指摘する。<sup>⑨</sup>このようにいうとき、前述したような輿服志のある種のとりとめなさもまた、司馬彪の姿勢を垣間見せるものだといえるだろう。輿服志は、それぞれの車服を逐一列挙しながら、その成立過程を断片的に述べる（例えば、朱轡の制が景帝の詔にはじまることへの言及など<sup>⑩</sup>）。のちにみる冠の制度では、この種の記述がとくに多い）体裁をとっており、祭祀志と礼儀志が個別に果たしている役割を双つながら負っている趣がある。ただそのせいか、経緯の記録としての網羅性にはやや難があり、例えば綬制に限っても、赤綬の賜与対象の変化や董巴『輿服志』に収められている別系統の綬制を明記しないことなど、制度の変遷に対する一種の鈍感さを認める<sup>⑪</sup>。連続する礼儀志・祭祀志がそうであったのと同様、輿服志が直前

の百官志を補う性格のものであったがために、その自己完結性が損なわれたとみることもできないが、それにしても粗が目立ちすぎる。恐らく、故事をもれなく掬い上げることが必ずしも司馬彪の究極の目標ではなく、秦始皇令においてひとつの解決が与えられた車服制度<sup>⑫</sup>については、故事の蒐集に熱意をもたなかったであろう。しかしそのことは逆に、司馬彪の漢家の故事の記録が西晋王朝による「参照」を目的としていたことの証左となりうるかもしれない。

## 第二節 冠の制度

『統漢書』輿服志の史料的特質について再確認したところで、具体的な制度の検討に移ろう。といっても、輿服志下には位階制度とかかわる記載があまり多くない——むしろそのこと自体が議論に値する——ので、序列についてよりも叙述の構成のほうにいつそうの注意を向けていくなくてはならない。

さて、輿服志下の記載順に従うと、まず問題になるのはルの大部分を占める冠の制度である。<sup>⑬</sup>ここに列挙される諸冠を用法に従って分けると、二種に大別できる。一つは前節で登場した冕冠に代表される祭祀用の一群、そしていま一つは日常的に着用されるグループである。これを具体的に示せば、以下のようになる。

## ①祭祀のためのもの

冕冠・長冠・委貌冠・皮弁冠・爵弁・建華冠・方山冠・巧士冠

## ②日常用いられるもの

通天冠・遠遊冠・高山冠・進賢冠・法冠・武冠・卻非冠・卻敵冠・樊噲冠

両者の差異は機会の相違によるものであるが、それぞれに含まれる各種の冠には、職務に応じた着用資格が定められている（詳細は後述）。もちろん、すべての職務に対応させて別種の冠を設定していたらこの程度のヴァリエーションでは済まないものであって、それぞれにおいて中心的位置を占める冕冠と進賢冠は幅広い着用者をもつと同時に、位階に応じた形態上の差異を設けられてもいるのではあるが、そうした位階序列の論理だけですべてが決まらないところに、冠の制度の最大の特徴がある。この点において、冠の制度は印・綬の制度や車制と根本的に異なっている。晋南朝の車服制度においては、冠の区別を決定する要素として着用者の職務が重要な役割を占めていたが、それと同じ現象が漢代の制度においても認められるのである。

こうした複雑な構成をもつ冠の制度を腑分けするにあたっては、車制についてそうしたように、単純な表をつくって済ませることは難しい。自ずと各規定そのものに立ち入る必要が生ずるが、すべてについてそれを行うとあまりに煩瑣なので、まずは冕冠と進賢冠の位階序列との対応について先に検討し、その後、職務に対応している諸冠のことをみていくことにしたい。

冕冠は、周知のように、非常に凝ったつくりをもつ冠である。<sup>18</sup>

冕冠、旒を垂らし、前後に遽延し、『礼記』玉藻のいうところの（玉藻なり。：冕は皆な廣さ七寸、長尺二寸、前圓後方、朱緑裏、玄上、（天子は）前に（旒を）四寸垂らし、後に三寸垂らし、白玉の珠を係け十二旒と為し、其の綬の采色を以て組纓を為る。三公・諸侯は七旒、青玉を珠と為す。卿大夫は五旒、黒玉を珠と為す。（旒は）皆な前に有り後に無く、各の其の綬の采色を以て組纓を為る。（天子以下）旁らに黹纓を垂らす。郊天地・宗祀・明堂には則ち之れを

冠す。

天子―三公・諸侯―卿大夫という序列が示されている。こうした冕冠の序列は単独でみるとかなりシンプルだが、実際の着用の際には祭服と組み合わせられ、積極的な視覚的效果をもったようである。前節では祭服の規定そのものを引かなかったから、その補足の意味も込めて、ここで紹介しておこう。

天子・三公・九卿・特進侯・侍祠侯、天地・明堂を祀るに、皆な旒冕を冠し、衣裳は玄上・纁下なり。乘輿文を備ふること日月星辰十二章、三公・諸侯は山龍九章を用ひ、九卿より以下は華蟲七章を用ひ、皆な五采・大佩・赤舄絢履を備へ、以て大祭を承く。百官の事を執る者、長冠を冠し、皆な祗服す。五嶽・四瀆・山川・宗廟・社稷・諸もの沾秩の祠には皆な拘玄・長冠し、五郊には各おの方色の如くすと云ふ。百官の事を執らざるは、各おの常冠・拘玄を服して以て従ふ。

天子―三公・諸侯までの序列構成は冕冠と同じだが、その下が「九卿・特進侯・侍祠侯」と明示されている。祭服の規定に続けて、（三公・九卿を除く）百官は祭祀への参加様態に応じて長冠・常冠のいずれかを冠すると述べられているから、必然的に冕冠の「卿大夫」（祭服の「九卿より以下」も同じ）は「九卿・特進侯・侍祠侯」の意とわかる（実際の記載では祭服のことが冕冠に先立って述べられるので、注意深く読みさえすればこのことは自明である）。特進侯・侍祠侯の朝位については、『続漢書』志二八百官志五列侯条に、

中興以來、唯だ功德を以て位特進を賜る者は車騎將軍に次し、位朝侯を賜るは五校尉に次し、位侍祠侯を賜るは大夫に次するのみ。とみえており、朝位が一定しない車騎將軍と同格である特進侯について

## 後漢服制考

は判断が難しいものの、少なくとも侍祠侯が位大夫であることは明らかである。ここから、「卿大夫」が（単なる雅称ではなく）漢代に行われていた周制の実態に沿った表現であったことがわかると同時に、冕服によって爵位と（三公・九卿以外の）官位との区別が可視的に表現されていたことも知れる。冕冠と祭服の組み合わせがもった「積極的な視覚的効果」とは、まさにこれである。

次に進賢冠について。

進賢冠は古の緇布冠にして、文儒者の服なり。前高さ七寸、後高さ三寸、長八寸。公・侯は三梁、中二千石以下博士に至るまでは兩梁、博士より以下小史・私學弟子に至るまでは皆な一梁なり。

宗室劉氏も亦た兩梁冠なるは、加服を示せばなり。

中二千石より下は博士・小史・私學弟子しか挙げがっていないが、『後漢書』志二明帝紀永平二年条注引『漢官儀』には、

三公・諸侯の冠は進賢三梁、卿・大夫・尚書・二千石・博士は兩梁を冠し、千石より已下小吏に至るまでは一梁を冠す。

とあり、ひろく小吏までが冠するものであったらしい。蔡邕『独断』巻下には、

進賢冠は、文官之れを服す。前高さ七寸、後三寸、長八寸。公・侯は三梁、卿・大夫・尚書・博士は兩梁、千石・六百石より以下は一梁なり。漢制にして、禮に文無し。

とみえており、これに従えば、文官は基本的に進賢冠であったということになる。こうした相違は制度の変化（＝進賢冠を冠する対象が徐々に増加した結果）によるものなのか、単に同じ状況の異なる表現にすぎないのか、いまひとつ判然としないが、進賢冠の梁数についてときに議論のあったことは、ルの末尾にあたる部分に、

安帝皇太子を立て、太子高祖廟・世祖廟に謁し、門大夫從ふに兩梁の進賢を冠し、洗馬高山を冠す。廟より罷つるや、侍御史任方奏すらく、「請ふ乗從の時に非ざれば、皆な一梁を冠し、宜しく以て常服と為すべからじ」と。事有司に下さる。尚書陳忠奏すらく、「門大夫の職は諫大夫の如く、洗馬の職は謁者の如し。故に皆な其の服を服すは、先帝の舊なり。方の言寢むべし」と。奏可とせらる。

とあることからわかる。<sup>24</sup>ここで「乗從の時に非ざれば皆な一梁を冠」といわれていることは、同じ地位にあっても場面によって着用する冠を異にしうる（ような制度運用が可能である）ことを意味している。「場」の性格と冠の制度との密接な関係は、冠が祭祀用の一群と常用のそれとに大別できることから知れるが、それ以上に注目すべきは、進賢冠の梁数が「場」の性格や位階序列のみによって決定されるのではなく、職掌に左右される場合のあることである。前掲の諸典籍には、大夫・尚書・博士・私學弟子といった具体例が挙げられていたが、これらのものが特筆された理由については、『晉書』卷二五輿服志、進賢冠条に、

漢建初中（七六―八三）、太官令の兩梁を冠するは、親ら御膳を省るを重しと為せばなり。博士の兩梁なるは、儒を崇べばなり。宗室劉氏も亦た兩梁を冠するを得るは、加服を示せばなり。

とあるように、親近の官や儒者として重んじられ、本来の地位よりも格式の高い冠を着けていたことの結果とみられる。<sup>25</sup>確かに、諸大夫は皇帝に近しく、私學弟子も學問に従事する身分である。<sup>26</sup>こうした特例の存在は、冕冠による爵位と官位の区別ともかわって、「職」の性格と冠の制度との密接な関係を示唆するだろう。そのことは、進賢冠以外の常冠についてみたとき、いっそうはつきりする。

高山冠、…中外官・謁者・（謁者）僕射の服する所なり。<sup>26)</sup>

法冠、…執法する者之れを服す。侍御史・廷尉正・監・平なり。

武冠、…諸もろの武官之れを冠す。侍中・中常侍は黄金璫を加へ、蟬を附して文と為し、貂尾を飾と為し、之れを趙惠文冠と謂ふ。

樊噲冠、…司馬・殿門の大難衛士<sup>27)</sup>之れを服す。

この数例からも承知されたとおり、いずれも着用者が明記されており、特定の職務と冠の種類が対応している。常冠についてはすべての冠にこうした規定があり、祭祀用の冠についても、

委貌冠・皮弁冠は制を同じうし、…委貌は阜絹を以て之れを為り、

皮弁は鹿皮を以て之れを為る。大射の禮を辟雍に行ふに、公・卿・

諸侯・大夫の禮を行ふ者委貌を冠し、…事を執る者皮弁を冠す。

爵弁、…天地・五郊・明堂を祠るに、雲翹舞の樂人之れを服す。

巧士冠、…常には服さず、唯だ天を郊るに、黃門の從官四人之れを

冠し、鹵簿中に在りて乘輿の車の前に次し、以て宦者四星を備ふと云ふ。

と、着用者の職務が記されることが多い。ただ、祭祀用の冠の場合には必ず「場」への言及を伴うが、それらが「常には服さ」ないものである以上、当然のことである。

かように、冠の制度においては「場」そして「職」の性格が重い役割をもち、位階序列はむしろ二の次にされている観がある。このことは印・綬の制度との相違として留意しておくべきであるが、看過できないのは、こうした多様な冠の起源として、理想化された夏・殷・周のほか、戦国諸国のことがしばしば語られる点である。

長冠、…初め高祖微なる時、竹皮を以て之れを為り、之れを劉氏冠と謂ひ、楚の冠制なり。

高山冠、…太傅胡廣の説に曰はく、「高山冠、蓋し齊王の冠ならん。秦齊を滅ぼし、其の君の冠を以て近臣の謁者に賜ひ、之れを服せしむ」と。

法冠、…或いは之れを獬豸冠と謂ふ。獬豸とは神羊にして、能く曲直を別つ。楚王嘗て之れを獲り、故に以て冠と為す。胡廣の説に曰はく、「…秦楚を滅ぼし、其の君の服するを以て執法の近臣の御史に賜ひ、之れを服せしむ」と。

武冠、…侍中・中常侍黄金璫を加へ、蟬を附して文と為し、貂尾を飾と為し、之れを趙惠文冠と謂ふ。胡廣の説に曰はく、「趙武靈王胡服を效し、金璫を以て首に飾り、前に貂尾を挿し、貴職と為す。秦趙を滅ぼし、其の君の冠を以て近臣に賜ふ」と。

衛氏冠、…呉の制なり。趙武靈王好んで之を服す。今施用せず、官に其の圖注有り。

とくに高山冠・法冠・武冠については、いずれも胡廣の説をもとに、齊・楚・趙の制度が秦にとりこまれ（それを漢が継承し）たという物語が語られている。こうした記載は冠の制度においてしか認められないものの、『統漢書』志二十九輿服志上の最初の部分には、

秦天下を并するに及び、其の輿服を攬び、上は選んで以て供御し、其の次は以て百官に錫ふ。

とあり、諸国の制を秦が再編成したものが漢制の原型となったという認識そのものは、輿服志全体に通底しているとみてよい。これに沿っていえば、『統漢書』輿服志において、漢朝は戦国諸国が体現していた地域的多様性の止揚者であり、秦はその先駆者として一定の評価を受けている、ということになる。<sup>28)</sup> しかもその立場は、もとは胡廣のものなのである。それを単なる故事の記録とみることもできるが、むしろわたしは、

## 後漢服制考

政界の空洞化によって地方統御能力がそこなわれつつあった時代に、昔日の漢朝へ寄せられたオマージュであったとみたい。「多様性の止揚者」としての漢朝の姿を、經典ではなく具体的な故事とそれに則った制度に仮託して伝えるその姿勢こそ、漢家の故事の典範化にこだわった胡広の面目躍如たる部分と思われるからである。

そのように考えたとき、進賢冠が「文儒者の服」と称され、その梁数において儒者が優遇されていたことには注意を要する。多くの文官がこれを着用するようになったことは、確かに、福井重雅の主張する「儒服の朝服化」現象<sup>(30)</sup>にほかならない。しかし実のところ、「儒服」とは異なる冠を常用するものが官僚機構中には厳然と存在し、むしろそれゆえに漢朝は、「多様性の止揚者」たり得ていたのである。それをふまえていうなら、後漢時代における衣服制度の変化とは、「儒服」の朝服化<sup>(31)</sup>という単線的なもののほかに、(天子の徳による一元的回収を伴う)天下内部の多様性の強調や、儒服以外の冠服をもとりこんだ階層的秩序<sup>(32)</sup>——しかもその中においては、「文儒者の服」がいつまでもそれとして意識され、儒者の優越性が可視的に絶えず再確認される——の構築といった、より儒家的な論理の核心に近い動きをも伴いつつ、多面的に進化したものとみるべきなのであろう。その意味で、明帝の服制改革ばかりを車服制度の一大画期にしてしまわない司馬彪の慎重さは、たいへん意味深長であるといわねばならない。

さて、ともかくも、冠の制度とその特徴について概観しおえ、「場」「職」の性格の影響とその背景に思いを致すことができた。では、残るその他の服飾品の制度の構成はいかようであろうか。いま少し歩を進めよう。

## 第三節 佩用品の制度

『統漢書』輿服志下にみえる佩用品には、(ワ)佩玉・(カ)佩刀・(ヨ)佩双印・(タ)綬の四種がある<sup>(33)</sup>。うち、制度の体系がわかるのは後三者で、綬についてはいま論ずる必要がないから、ここで扱うのは佩刀と佩双印のみということになる。

佩刀、乗輿は黄金の通身貂の錯、鮫魚の鱗を半ばにし、金漆錯・雌黄室、五色の罽もて室の華を隠す。諸侯王は黄金錯の環・挾、鮫を半ばにし、黒室なり。公・卿・百官は皆な純黒にして、鮫を半ばにせず。小黃門は雌黄室、中黃門は朱室、童子は皆な虎爪文、虎賁は黄室・虎文、其の將は白虎文、皆な白珠の鮫を以て鑢口の飾と為す。佩雙印は長寸二分、方六分。乗輿・諸侯王・公・列侯は白玉を以てし、中二千石より以下四百石に至るまでは皆な黒犀を以てし、二百石より以下私學弟子に至るまでは皆な象牙を以てす。上の合絲、乗輿は縢を以て白珠を貫き、赤罽の縢、諸侯王より以下は縢を以てし、赤絲の縢なり。縢・縢(の色)は各おの其の印質の如くす。

前者は特定の官職に対して変化がつけられており、冠の制度と似た特徴を認めうる。後者は皇帝(合絲すなわちひもで区別される)——諸侯王・公・列侯——中二千石・四百石——二百石以下、という序列を有する。三百石への言及がないが、四百石と三百石の共通性とその特殊性——周制と官秩序列が部分的に齟齬する領域——に鑑みて、この「四百石」は「四百石・三百石」または「四百石・三百石長相」の意ととるのが妥当であろう<sup>(34)</sup>。ただ、この点が明らかでないために、佩双印の制度が官秩序列によるのか周制によるのかは、にわかには判断しかねる。

#### 第四節 女性の服飾の制度

女性の服飾については、レに複雑な記載がある。ここでは大綱のみ示す。

太皇太后・皇太后の廟に入るの服は紺上・阜下、蠶(の服)は青上・縹下、皆な深衣の制にして、領袖の縁を隠すに條を以てし、翦髻の蘭・簪珥あり。…皇后の廟に謁するの服は紺上・阜下、蠶は青上・縹下、皆な深衣の制にして、領袖の縁を隠すに條を以てす。假結・步搖・簪珥あり。…貴人の蠶を助くるの服は、純縹の上下、深衣の制なり。大手結・墨玳瑁(の璽をもつ簪)、又た簪珥を加ふ。長公主の見會の衣服は、步搖を加へ、公主は大手結、皆な簪珥有り、衣服制を同じうす。公主・封君より以上は皆な綬を帶び、采組を以て緹帶と為し、各おの其の綬色の如くす。…公・卿・列侯・中二千石・二千石の夫人は、紺繒の蘭、黄金の龍首白珠を銜へ、魚須璽、長一尺、簪珥と為す。廟に入り祭を佐くる者は阜繒の上下、蠶を助くる者は縹繒の上下、皆な深衣の制にして、縁あり。二千石の夫人より以上皇后に至るまでは、皆な蠶衣を以て朝服と為す。

不明瞭な点も多いが、大雑把にみて、太皇太后・皇太后―皇后―長公主―貴人・公主(・封君)―公・卿・列侯・中二千石・二千石の夫人、という序列構成になっているようである。これは綬制の序列とほぼ一致しているが、なお検討を要するのは、皇后と長公主だけがもつ步搖についてである。この步搖の存在が、太皇太后・皇太后と皇后(ともに黄赤綬)、長公主と貴人(前者は赤綬であり、後者は条件つきで赤綬を賜与される)という比較的ランクの近い地位の間に差異を生ぜしめているか

らである。

步搖着用の意味や理由については明らかでなく、皇后と長公主の間にも皇帝の同世代の女性(皇帝からみて皇后は妻、長公主は姉妹)であるという以上の共通性は見あたらないが、その賜与事例として面白いのは、『後漢書』紀一〇上皇后紀上、和帝鄧皇后紀にみえる次の一節である。

(和帝)元興元「二〇五」年、帝崩す。…殤帝生まれて始めて百日、(鄧)后乃ち之れを迎立す。后を尊んで皇太后と為し、太后臨朝す。和帝の葬の後、宮人並びに園に歸するに、太后周・馮貴人に策を賜ひて曰はく、「…其れ貴人に王の青蓋車・采飾の輅・驂馬各おの一駟・黄金三十斤・雜帛三千匹・白越四千端を賜ふ」と。又た馮貴人に王の赤綬を賜ひ、未だ頭上の步搖・環珮有らざるを以て、加へて各おの一具を賜ふ。

本来、貴人には步搖を受ける資格がなく、実際にこのときまで馮貴人は「未だ頭上の步搖・環珮有らざる」状態であったのであるから、この步搖賜与はあくまでも特例である。このとき、步搖とともに赤綬が与えられているが、これらを受けたのが馮貴人に限られ、もう一人の周貴人にはいずれも賜与されなかった点に着目したい。

かつてわたしは、このとき下賜品として赤綬が選ばれた理由を、それが宗室との血縁の表象であったことに求め、あるいは馮貴人こそが殤帝の生母だったのであるかと推測した<sup>37)</sup>。步搖が皇后にあって貴人になくアクセサリーであることを考慮すると、この步搖賜与は馮貴人を皇后扱いする意味あいをもっていたことが疑われるのであって、そのことは馮貴人が殤帝の母であった可能性を強く示唆する。ここから赤綬と血縁原理との関係が一段と明瞭になるが、しかるに、そうした性格をもつ赤綬を女性のうちで定制として佩びることのできたものも、皇后のほかは歩



## 後漢服制考

揺をもつことができたものも、長公主のほかには存在しなかったのである。<sup>38)</sup> こう考えると、長公主を接点として、赤綬と歩揺の間に（器物の性格はともかく、その制度運用において）一種の親和性のようなものが存在していたことは認めてもよいように思われる。両者の賜与が連動した事例は、『後漢書』志六礼儀志下、諸侯王列侯始封貴人公主薨条注引丁孚『漢儀』にも、

孝靈帝馬貴人を葬るに、歩揺・赤綬・青羽蓋・駟馬を贈る。…

とみえている。とはいえ、皇后は歩揺を有しながらも黄赤綬であるのだが、後漢末になると赤綬へ格下げされ、赤綬の賜与範圍が歩揺のそれと一致するようになる。もしかすると、赤綬と歩揺の親和性は、皇后綬引き下げの事情にからんでいたのかもしれない。<sup>41)</sup>

以上でみたような服制のほか、婚礼の際の衣裳にも公的なきまりがあった。レの部分はこう結ばれる。

公主・貴人・妃より以上は、嫁娶に錦・綺羅・縠縠を服するを得、

采十二色、重縁の袍なり。特進・列侯より以上は錦縠、采十二色。六

百石より以上は重練、采九色にして、丹・紫・紺を禁ず。三百石よ

り以上は五色の采、青・絳・黄・紅・緑なり。二百石より以上は四

采、青・黄・紅・緑なり。賈人は紺・縹のみ。

公主と列侯は同じ紫綬であるのに、ここで区別されているのは、公主の場合こうした衣裳をまとうのが本人であるのに対し、列侯の場合はその配偶者であるからであろう。六百石が境界になっていることは、これが周制（千石～四百石・三百石長相は位大夫）ではなく官秩序列に沿って構想された制度であることを伺わせるが、なぜそうになっているのかは不明である。

## 第五節 漢代車服制度における印・綬の制度の位置

さて、議論は多岐に互ったが、ともかくもわれわれは、漢代の車服制度の全容を概観しおえた。そこにはどのような特徴を見いだし得たのだろうか。

まずいえることは、全体に互って、官秩序列と周制の影響が混在していたことである。この結論は、官秩序列を漢代の唯一絶対の位階序列とみなす向きには納得できないものかもしれないが、周制が朝位・選舉制度・刺史の監察対象・「有罪先請」の特権など当時の諸制度に広範に影響していたことを想起すれば、ごく当然のことである。両者が本当に「混在」しており、それらの間に何らの使い分けもなかったのか、それとも「使い分け」の論理が『統漢書』輿服志の史料的特質・限界によって見えなくなっているだけなのかは、もはや知る由もない。が、いずれにしても、官秩序列と周制の不一致・並存はもはや自明のことになったといつてよからう。

もうひとつ確認しておきたいのは、「公」「私」の別であるとか「場」や「職」の性格であるとかいった区別はいくつかみられたものの、官秩序列・周制以外の序列は、車服制度のうちにとくに存在していないと思われることである。他の新たな序列を意識しなくてよいと確かめられたことは、考察の対象を限定するうえで重要な意味をもつ。

かように、官秩序列と周制が別個の序列であり、その両者のからみあいのみによって漢代車服制度中の位階序列を説明してしまつてよいのであれば、印制（官秩序列に従う）と綬制（周制に従う）に焦点を絞って議論を進めることは、結果的にいえば、大過ない手法であったことにな

る。車服制度を構成する二つの重要な原理を代表する器物どうしがセツトにされ、任官・封爵に際して賜与されていたのは、印・綬が当時の支配機構の秩序形成にもっとも重要な役割をはたしていたことの証左といえるのではないか。

そのうえで、改めて『続漢書』輿服志の全体をふり返ってみると、興味深い事実が気づかされる。輿服志下は前半（ル・ヨ）がすべて男性の服飾にさかれ、女性のそれについては一律に後回しにされており（レ）、ちょうど両者をつなぐ位置（タ）に他ならぬ綬制が配されていたわけだが、実はこの綬こそ、『続漢書』輿服志下で述べられるもろもろの器物の中で、男女が共有するただひとつの位階標識であつたのである。そのことは輿服志下の、

諸國貴人・相國は皆な綠綬、三采、綠・紫・紺、淳綠圭、長二丈一尺、二百四十首。

という一節において、女（諸國貴人）・男（相國）が同列に並べられ、その位階標識がまったく同一のつくりをもつと説明されているところからも明らかである。これに対し、輿服志上では随所に女性の車駕のことがみえており、述べかたそのものは男女を区別していないが、実際の車駕には女性の乗用時にそれとわかる付加物が装着されるので、男女が同じ車駕に乗ることは結果的にあり得ないようになっていた。つまり、漢代車服制度の中にあつてジェンダーフリーな存在であつたのは、ただ綬だけであるということになるのである。このことは、周制に拠るという点において綬が他の位階標識と共通した性格をもつ一方で、それらとはまた一線を画した特殊な役割を担っていたことを示している。

しかもここで、綬が内臣と外臣の区別さえ越えていたことを想起するならば、それは漢代車服制度における唯一の超越的位階標識であつた、

とさえいえるだろう。そしてそうした超越性を有することこそ、印による「封建擬制」によって人為的に創出された漢朝内部の多様性を一元的に回収する役目を綬が負っていたことの証であり、まさにこの点に印・綬の組み合わせだけがもつ制度的な重みがある。いったんそのことを承知したうえは、漢代車服制度からそこに内在する二つの位階制度を代表する器物をそれぞれ挙げよといわれたとき、われわれは、躊躇せず印・綬をとりだすことになるはずである。漢代車服制度において印・綬が占めていた位置とは、つまり、こうしたものである。

が、その一方で、『続漢書』の記載からは、印・綬の制度が官僚機構を離れ、礼制一般のうちに埋没していく姿も確認されていた<sup>(46)</sup>。それは印・綬の役割の変質ということよりも、車服制度全体の整備・充実の結果であらうが、どちらにせよ、後漢末以降になると印・綬の存在意義が相対的に低下していったことは確かである。それと並行するかたちで、六朝期にかけ、印・綬の奉拝は任官・封爵儀礼の中核からはずれていく<sup>(47)</sup>。その理由としては、辞令の木から紙への変化が重くみられていたが、さのみならず、車服制度の整備の進展が印・綬だけを特別視することを拒絶するようになった可能性をも視野に入れておく必要がある。そのようにしてあらわれた晋南朝の車服制度は、車服の複雑な組み合わせによって、漢朝の冠制をはるかに超えるかたちで、自らの内部の多様性を巧みに表現していた<sup>(48)</sup>。そうした制度史的展開は、国家が印・綬によって支配機構を積極的に再分割・再統一する時代から、自らの内部のさまざまな分子を受動的に認知する時代へと移り変わったことを示している。胡広が冠の制度に託して語ろうとした「物語」は、その流れに抗おうとした後漢末知識人の幻想だったのである。

このような趨勢の中で、博士の両梁冠によって表現されていた儒家の

## 後漢服制考

特殊性も、各種の多様性のうちに解消されていったのであるが、そうした「受動的」な「認知」は、単なる現状認識にとどまったのではない。国家が多様性を創出するのではなく、それを受けとめる側にまわったことは、なおさら、全体を一元化する論理を強く要求しただろう。そのため新たに現れてきたものこそ官品で、その登場は、旧来の漢制を古制の領域に昇華させることを必然とした。ここに至って、漢家の故事たる官秩序列は儀礼化し、それと同時に周制は官秩序列へと収斂して、両者は一体となった。<sup>49</sup> ゆえに、官秩序列は官品にとって代わられて実質上の意味をもたなくなったあとともなお、依然として存在しつづけたのである。そして、こうした動きと並行しつつ、多様性を一元化する機能をもった「封建擬制」の構造もまた、その命脈を保っていた。<sup>50</sup> 儒家を可視的に示すことが意味を失うかたわら、きわめて儒家的な理念のもとに構想された周制や「封建擬制」の論理が漢制の陰に隠れて残存したことは、少なくとも制度史の観点からみる限り、儒家がもはや特別な存在ではなく、普遍化して制度の血肉となったことを示しているだろう。胡広たちの「幻想」は、こうしてかたちを変えながら、後世に受けつがれていったのだった。

## 結言

漢代車服制度は、官秩序列と周制の複雑なからみあいによってできていた。両者の用法分化がいかにあったのかについては、『統漢書』輿服志が時代的に異なる制度を混在させていることもあって、明確な結論を得られないが、両者が別個の序列であることは疑いない。これら二つの序列を端的に代表しつつ、時を同じくして、その他の器物と一線を画

す重要な役割をも担っていたのが、印と綬であった。その「重要な役割」とは、従来指摘してきたとおり、漢朝内部を再分割・再統一する機能である。とくに綬の「再統一」の能力は、輿服志下にある、男性の服飾の記述と女性のそれとを橋渡しする位置に綬制が配置されていたことにもあらわれていた。漢代車服制度の中で格段に重い位置にありながら、車服制度全体の骨格とも通底していたという点で、印・綬を車服制度から抽出して議論の対象とすることは十分な妥当性があると認められる。

他方、官秩序列や周制よりも「場」や「職」の性格の影響をいっそう強く受けたものとして、冠の制度があった。冠の差異が「職」に左右されること、およびそれらの冠の来源について、胡広は戦国諸国の制度を引きながら説明していたと司馬彪は伝える。そうした胡広の論理の背後には、漢朝を地域的多様性の止揚者として演出しようとする意図が見とおせる。これは印・綬による漢朝の再分割・再統一と根を同じくする儒家的な発想と考えられ、漢代にそうした思想が制度中に浸透していたこと、そしてそれが後世に引きつがれていったことを、儒家の普遍化の一面として指摘することができる。

かくして、漢代車服制度における印・綬の制度の特殊性と普遍性とともに確認し、これまでの議論の方向性に根拠を与えることができた。このことによって、印・綬を素材にした一連の仕事は、ひとつの通過点に到達したものと考えている。印・綬に投影された「幻想」のもった歴史の意義、そしてそれを支えた国家支配のあり方について検討する準備は、ようやく調った。そうした課題に向けた重要な分岐点にあることを確認しつつ、まずは擱筆する。

## 【註】

(1) 『史記』四七、二〇〇六年。

(2) その成果は、「漢代官僚機構の構造—中国古代帝国の政治的上部構造に関する試論—」(九州大学東洋史論集)三一、二〇〇三年)に集約しておいた。

(3) 詳しくは前掲註(1)拙稿五五～五六頁を参照。ここでは、本稿にかかわるものについてのみ再掲する。

三、絳冕・衣服(中華書局版標点本 三六六一～三六七〇頁)

又、服制のおこり(三六六一～三六六二)

ル、天子・諸侯・百官の冕服と諸冠(三六六三～三六七〇)

ヲ、幘(三六七〇～三六七二)

ワ、佩玉(三六七二～三六七三)

カ、佩刀(三六七三)

ヨ、佩双印(三六七三)

タ、綬(三六七三～三六七五)

レ、諸夫人の衣服と服飾品(三六七六～三六七七)

ソ、祭服・朝服の別(三六七八)

(4) 車服制度に限らない明帝の礼制改革の全体については、藤田忠「上陵の礼よりみた明帝の礼制改革について」(『国士館史学』一、一九九三年)、「明帝の礼制改革について—『三朝の礼』の成立過程—」(『国士館大学文学部人文学会紀要』二六、一九九三年)を参照。

(5) 漢代の車服の中でも衣服については研究蓄積が突出して多いが、幸いにもそれらを網羅した李之檀「編」『中国服飾文化参考文献目録』(中国紡織出版社、二〇〇一年)によって関連文献の検索が容易になったので、これを紹介することですべてに代表させておく。但し、わたしの認識では、位階制度を再構成する手段として衣服制度を分析するという方法は小林聡「六朝時代の印綬官服規定に関する基礎的考察—『宋書』礼志にみえる規定を中心にして—」(『史淵』一三〇、一九九三年)を嚆矢とするのである。漢代について同様の作業を試みた先学は寡聞にして知らない。

(6) 劉知幾『史通』外篇古今正史に、  
(宣帝)熹(原作「嘉」)浦起龍『史通通釈』に従い改む)平中「一七二～一七七」、光祿大夫馬日磾・議郎蔡邕・楊彪・盧植東觀に著作

し、紀・傳の成すべき者を接續す。而して邕別に朝會・車服二志を作るも、後に事に坐して朔方に徙され、上書して還るを求め、續けて十志(『後漢書』列伝五〇下蔡邕列伝によれば「十意」)を成す。

(7) 司馬彪が輿服志の撰述にあたって蔡邕の言に依拠したことについては、劉昭が「後漢書注補志序」の中で、

司馬(彪)の續書、摎りて八志を為り、…車服の本は即ち董(巴)・蔡(邕)の立つる所に依り、…と述べている。とはいえ、輿服志が『東觀漢記』や『独断』に拠ったにしても、それは全面的なものではないと思われる。なぜなら、『統漢書』輿服志下が綬制を含むのに対し、『独断』にみえる車服制度にはまとまった綬制の記載がみられず、また『東觀漢記』でも綬制については百官志で述べていたと思われる(前掲註(1)拙稿五六～五七頁)からである。そのことは、司馬彪自身の認識が輿服志の記述に反映されていることの証であり、仮に明帝の改制を冕冠に即して述べるしかたが蔡邕に倣ったものだととしても、司馬彪はそれに自覚的に同意した上で従ったのだとみるのが妥当であろう。蔡邕と司馬彪の著述意図の共通点ならびに相違点については、渡邊義浩「司馬彪の修史」(『大東文化大学漢学会誌』四五、二〇〇六年)三〇～三二頁に詳らかである。

(8) 『統漢書』輿服志上・下の導入部分は駢文調であるから、修辭上の理由で明帝への言及が欠落したという観方もまったく不可能ではない。確かにヌの末尾においては、

世祖(光武帝)の踐祚するに至り、土中に都し、始めて三雍を修め、兆を七郊に正す。顯宗(明帝)遂に大業を就し、初めて旒冕・衣裳文章・赤舄絢屨を服し、以て天地を祠り、三老五更を三雍に養ひ、時に治平を致せり。

とあり、明帝の改制が高く評価されている。とはいえ、輿服志全体と明帝の制定した制度がイコールであることの根拠としてこの一文を読むことは極めて困難であるばかりか、司馬彪が明帝の改制と祭祀との関係を重くみていた(＝明帝が車服制度に影響を与えたことは認めるが、それが制度を整備するうえで決定的な意味をもったわけではない、の意。司馬彪が祭祀と車服との間に一定の距離を認めることについては後掲註(14)で

## 後漢服制考

述べる)ことがここでも再確認できるから、輿服志の内容を明帝の制度として理解することにはやはり疑問符をつけざるを得まい。

(9) 前掲註(7) 渡邊論文三二頁。

(10) 前掲註(1) 拙稿六一―六二頁。

(11) 拙稿「後漢時代の赤綬について」(『福岡教育大学紀要』五三「第二分冊 社会科編」、二〇〇四年)。

(12) これについては拙稿「漢代における綬制と正統観―綬の規格の理念的背景を中心に―」(『福岡教育大学紀要』五二「第二分冊 社会科編」、二〇〇三年)で詳しく論じた。

(13) ここで疑問を感じるのは、そうした「鈍感さ」の結果として、司馬彪が拠ったことになっている董巴・蔡邕の説が、少なくとも綬制については無視されたかたちになっていることである(赤綬に関して『独断』と『統漢書』輿服志の間に齟齬があることは、前掲註(11) 拙稿九頁を参照)。

その一方で、冠の制度については、蔡邕も継いでいたはずの胡広の説が繰り返し引かれている(後述)。この点においてもやはり輿服志には首尾一貫性がなく、誰かがまとめた書物に全面的に乗ったというよりは、相当の範囲に互って取材した様子が窺われる。それが泰始令における車服制度の大成といかなる関係にあるのか、興味深いところではある。

(14) さらに突きつめれば、礼儀志・祭祀志はこの二つだけで単位をなすものではないし、それは百官志・輿服志も同様である。『統漢書』八志は、主に天にかかわる前半部(律曆・礼儀・祭祀・天文・五行)と地・人にかかわる後半部(郡国・百官・輿服)が組み合わされて成り立っており、それぞれの内部は相互に不可分の関係にある。とりわけ冒頭に置かれた律曆志は、礼儀や祭祀の設定の根拠や構成原理を説明するものであり、これを切り離したかたちでの論理的完結はあり得ない。

なおもういふなら、『漢書』では、諸侯・百官といった人的構成が表にまとめられたあと、律曆志に続けて礼楽・刑法・食貨の順で制度・社会のことが述べられ、ようやく天との対話の方法である郊祀のことがあらわれたのち、天文や地理など空間に関する天文・五行・地理・溝洫の各志が続いていく(最後の藝文志は、以上すべてのごとくについての「記録の記録」である)のであり、『統漢書』とは根本的に構成を異にする。この点にこそ『漢書』の現体制・現世に対する賛美の意図が表れていると捉える

ことはできないか。

(15) 『宋書』礼志で示される整然とした車服制度が晋泰始令と密接に関係することについては、前掲註(4) 小林論文を参照。

(16) 漢代の諸冠については、林巳奈夫「漢代男子のかぶりもの」(『史林』四六・五、一九六三年)が詳しい。

(17) 前掲註(4) 小林論文、ならびに小林聡「晋南朝における冠服制度の変遷と官爵体系―『隋書』礼儀志の規定を素材として―」(『東洋学報』七七・三・四、一九九六年)。

(18) 冕冠が後述のような構造をとる理由について、劉昭注には、  
「禮緯に曰はく、「旒をば目に垂らし、續もて耳を塞きて、王者讒を聴かず非を視ざるを示すなり」と。  
とある。

(19) 車騎將軍の朝位の変動に関しては、拙稿「漢代における朝位と綬制について」(『東洋学報』八二・三、二〇〇〇年) 一五―一六頁を参照。

(20) のみならず、前掲註(19) 拙稿註(8) で述べたとおり、「位侯」という朝位が存在しないことも諒解される。

(21) 前掲「漢官儀」『独断』において兩梁といわれている「大夫」は、ここにみえる太子門大夫など「大夫の官」の意であって、位大夫の意ではあるまい。

(22) さらなる詳細については、『統漢書』志三〇輿服志下、進賢冠条注に、  
荀綽晉百官表注に曰はく、「建光中(一一二)、尚書陳忠以為へらく、『令史質堪上言すらく、太官は宜しく兩梁を著くるべしと、尚書孟布奏すらく、太官の職は鼎俎に在りて陞位に列せざれば、堪大夫に比して兩梁冠ならしめんと欲するは、宜しく許すべからずと。臣伏して惟んみるに、太官の職は王の饗を典掌するに在り、六清の飲を統べ、八珍の饌を列ね、百品の羞を正し、四方の貢を納れ、奉ずる所尤も重く、思を用ひて又た勤む。明詔口實の御を慎しみ、有敗の姦を防ぎ、増ます其の選を崇ぶ。侍御史は捕案を主り、太醫令は方藥を奉じて供養し、符節令は幡信・金虎を掌り、故に位大夫に従ひ、車に輶有り、冠に兩梁有るは、親疏を殊にし内外を別かつ所以なり。太官令は供養を以て之れを言へば最も親近にして、職事を以て之れを言へば最も煩多なり。又た高選、又た執法をして太醫令に比し、

科同じく服等しく、而るに冠二人にして殊なるは、名實副はず。又た博士は秩卑けれども、其の先王の訓を傳ふるを以て、故に尊んで之れを異にし、大夫の冕を服せしむ。猶ほ此のごとく之れを言へば、兩梁冠は必ずしも陞位に列するに非ざるなり。建初中、太官令は兩梁冠なりき。春秋の義、復古を大なりとす。堪の言の如きは典に合ひ、施行すべし。帝心を克厭すれば、即ち之れを聽用せよ」と。

とある。

なお、右の一節では兩梁冠が大夫の冠であるような言いかたがされているが、これは諸史料が千石・六百石（一部例外はあるが、基本的に黒綬「位大夫」以下を一梁とするのと矛盾する。ここでいう「大夫」を「上大夫」すなわち卿の意と解することで解消は一応可能だが、陳忠が「大夫」の例として挙げている諸官が位卿を示す青綬を帯びていた形跡はないので、根本的な解決とはならない。さらに、前掲註（17）小林論文五頁が指摘するとおり、晋では兩梁と一梁の境界が千石と六百石の間にまで下りてきているが、他方、千石・六百石はいずれも黒綬なので（後述のごとく、晋以降は官秩序列と周制が一致する）、やはり梁数と周制が齟齬していたことになる。以上から考えると、漢代においても進賢冠の梁数は最初から周制と重なっておらず、進賢兩梁冠が大夫の冠だというのは単なる修辭とみるほうが妥当であろう。かような梁数と周制の不一致は、冠の制度に「場」や「職」の性格が強く作用していたことにかかわっていると思われる。

（23） 章帝建初年間に親近の官の梁数優遇がはじまったとみられることは、東晋次『後漢時代の政治と社会』（名古屋大学出版会、一九九五年）第一章第二節「章帝の政治と儒家理念」が指摘する、章帝の親親主義重視の方針とかわるものと思われる。

（24） 『統漢書』志二百官志二に、  
光祿大夫、比二千石。本注に曰はく、員無し。凡そ大夫・議郎は皆な顧問・應對を掌り、常事無く、唯だ詔令の使ふ所のままなり。……とある。

（25） 私学弟子がいかなる身分であるかについては、長沙走馬樓呉簡にこれがいしはばあらわれることから近年議論が多いが、制度上のことに限つ

ていえば、庶人とは何らかの点で異なる扱いを受けた学問の徒であるという以外、確たることはわかっていない。これまでの論争の経緯も含めた最新状況は、王子今・張榮強「走馬樓簡牘・私学・考議」（長沙簡牘博物館・北京呉簡研討班「編」『呉簡研究』第二輯、崇文書局、二〇〇六年、所収）に示されている。

（26） 『晋書』卷二五輿服志に、  
高山冠、……中外官・謁者・謁者僕射の服する所なり。  
とある。

（27） 不詳。前掲註（16）林論文一一一頁のように、「大難」は普通なら「大難」と読むところであり、錢大昭『統漢書辨疑』卷九も「難とは、即ち郷人難の難なり」といつているが、ここはそうではないであろう。蔡邕『独断』巻下に、

樊噲冠、……司馬殿門の大護衛士之れを服す。

とあり、福井重雅「編」『訳注 西京雜記・独断』（東方書店、二〇〇〇年）三四四頁はこれを「大護衛士」と解する。従うべきである。

（28） 実際に漢朝が皇帝六璽の制度をとおして地域的多様性の統合をはかっていたことは、拙稿「皇帝六璽の成立」（『中国出土資料研究』八、二〇〇四年）において明らかにした。その議論に関連させていえば、冠の制度において謁者が齊に、執法官が楚に、武官が趙にことよせられていることの意味にも注意を払っておかねばならないが、いまはそこに踏みこむ余裕がない。

（29） 前掲註（7）渡邊論文三二頁。

（30） 福井重雅「漢代儒教の官学化と儒服の役割」（『日本秦漢史学会報』七、二〇〇六年）。

（31） 拙稿「対匈奴関係からみた漢朝支配の推移と確立」（『歴史学研究』八〇九、二〇〇五年）。

（32） 佩玉については林巳奈夫「佩玉と綬―序説―」（『東方学報』四五、一九七三年）『中国古玉の研究』吉川弘文館、一九九二年、所収）、佩玉については石井仁「虎賁班劍考―漢六朝の恩賜・殊礼と故事―」（『東洋史研究』五九、四、二〇〇一）がある。

（33） その詳細については、拙稿「綬制よりみた前漢末の中央・地方官制―成帝綬和元年における長相への黒綬賜与を中心に―」（『集刊東洋学』八四、

## 後漢服制考

- 二〇〇〇年)、「前漢末〜後漢における地方官制と『周礼』」(『東洋文化』八一、二〇〇一年)を参照。
- (34) 元・陶宗儀『南村輟耕錄』卷二四、剛卯条は「二百石」を「三百石」に作り、前掲註(25)王・張論文はこれを是とするが、単に四百石と二百石の間が埋まっているというだけの理由で元代のものに從うのは難しいように思われる。
- (35) これらの女性の綬の序列については、拙稿「漢代の印制・綬制に関する基礎的考察」(『史料批判研究』三、一九九九年)付表3、および前掲註(11)拙稿を参照。
- (36) 歩搖のつくりについては、引用にあたって省略した部分に、歩搖は黄金を以て山題を為り、白珠を貫きて桂枝の相ひ纏へるを為る。一爵・九華あり、熊・虎・赤熊・天鹿・辟邪・南山の豊大特の六獸は、詩の所謂「副笄六珈」なる者なり。諸もろの爵・獸は皆な翡翠を以て毛羽を為り、金題なり。白珠の瑤繞り、翡翠を以て華と為すと云ふ。
- と明記されている。ここには熊・虎・赤熊・天鹿・辟邪・南山の豊大特という「六獸」がみえるが、前掲註(1)拙稿六五〜六六頁で言及した「龍・虎・鹿・熊」という「動物の序列」とどうかかわるのであるうか。
- (37) 前掲註(11)拙稿八頁。
- (38) 安帝期ごろまでに長公主の赤綬が制度的に固定されていたことは、前掲註(11)拙稿五頁で指摘した。
- (39) 原作「赤紱葬」。渡邊義浩・藤高裕久・塚本剛・平田陽一郎「編」『全訳後漢書 志(二)』(汲古書院、二〇〇二年)二五八頁に従い、「葬」字を削る。
- (40) 前掲註(11)拙稿第四節「後漢末の赤綬と皇后」。
- (41) しかし依然としてわからないのは、太皇太后・皇太后が歩搖を有さないことの理由である。それが配偶者を喪失したものであること、皇后・長公主より上の世代のものであること、皇后どころか皇帝すらしのぐ至高性をもちえたこと、等々さまざまなことが浮かぶが、いずれも歩搖と結びつける根拠がない。他日を期すしかなからう。
- (42) 前掲註(19)(33)拙稿。
- (43) 前掲註(1)拙稿六一頁附表ならびに六六頁。
- (44) 異民族に対しても朝位が与えられるとともに、それに合致した綬が賜与されていたことについては、前掲註(19)拙稿を参照。
- (45) 前掲註(2)拙稿。
- (46) 前掲註(1)拙稿五六〜五八頁。なお、これに関連して前掲註(14)で議論したことに言い添えると、『統漢書』が祭祀志・礼儀志と輿服志の間に距離を設けつつ、百官志と輿服志を近しいものとして扱っていることには、相応の注意が必要である。ここから推すに、司馬彪は印・綬を官制から切り離したものの、それでもなお、他の車服ともども官制にひきつけて考えていたと思われるのであり、車服制度を純然たる「礼」の一部分として考えていたとするのは難しいのではないか(無論、官制も人為的秩序であることにおいては広義の礼に含まれるが、それをいえるかなる制度もすべて礼制になつてしまう)。要するに、車服のことを礼志のうちで記す『宋書』のような立場に至るまでには、司馬彪の時代からもう少し時間を要したと思われるのである。晋以降の車服制度が漢制から連続していることは事実だが、その道筋は決して直線的なものではないのだから。
- (47) 大庭脩「漢代官吏の辞令について」(『関西大学文学論集』一〇・一、一九六〇年)、「魏晋南北朝告身雜考―木から紙へ―」(『史林』四七・一、一九六四年)。
- (48) その様相は、前掲註(4)(17)小林論文、および小林聡「魏晋南北朝の帯剣・簪筆に関する規定について―梁の武帝による着用規定の改変を中心―」(『埼玉大学紀要教育学部』「人文・社会科学」(Ⅲ)四六・一、一九九七年)に明らかである。
- (49) 小林聡「漢六朝時代における礼制と官制の關係に関する一考察―礼制秩序の中における三公の位置づけを中心に―」(『東洋史研究』六〇・四、二〇〇二年)・「西晋における礼制秩序の構築とその変質」(『九州大学東洋史論集』三〇、二〇〇二年)。
- (50) 前掲(2)拙稿二七〜二八頁。
- 【付記】 本稿は、平成一八年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B)「車服制度よりみた漢帝国の位階制度の研究」)による研究成果の一部である。